☆キリストの聖体（６月１１日）の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

第一朗読（申命記　８章２－３、14ｂ－16a 節）

モーセは民に言った。あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。 こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。
主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。 人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。
主はあなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出し、炎の蛇とさそりのいる、水のない乾いた、広くて恐ろしい荒れ野を行かせ、硬い岩から水を湧き出させ、あなたの先祖が味わったことのないマナを荒れ野で食べさせてくださった。

第二朗読（使徒パウロのコリントの教会への手紙Ⅰ　10 章 16-17 節）

皆さん、わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。 わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。 パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。 皆が一つのパンを分けて食べるからです。

福音朗読（ヨハネよる福音書　6 章 51～58 節）

そのとき、イエスはユダヤ人に言われた。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。 このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。
わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」
それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。イエスは言われた。
「はっきり言っておく。 人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなた

たちの内に命はない。 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。 生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。
これは天から降って来たパンである。 先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。 このパンを食べる者は永遠に生きる。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

いよいよ梅雨に入りましたね。教会の屋上の防水が切れて、雨漏りがしてきました。早急に直そうと思います。今日はキリストの聖体、ご聖体の祝日です。いつもはあまり気にせずいただいているかもしれませんが、イエス・キリストの心のこもった贈り物だということを思い出しましょう。この恵みは誰も思いつかなかった神様だからこその贈り物なのです。小さいころ受けた初聖体の時の純真な気持ちを思い出し、ご聖体を味わってみましょう

第一朗読（申命記　８章２－３、14ｂ－16a 節）

「主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい」というモーセの言葉です。私たち一人一人の人生の歩みを重ね合わせてみましょう。苦しみによって試されたこともあるでしょう。それは私たちの人生において主なる神にのみ私たちをゆだねるべきものなのだと諭すためであったとモーセは私たちに語り掛けています。その中で主なる神は私たちに体の食べ物と霊的な食べ物マンナ、ご聖体を与え続けられているのです。旅路の糧です。亡くなった方のためにも人々は食べ物を墓前に供えることもあります。生きているからこそ旅路の糧が必要なのです。決してなくならない、途絶えることのない旅路の糧を神はいつも望むときに与えてくださるのです。

第二朗読（使徒パウロのコリントの教会への手紙Ⅰ　10 章 16-17 節）

イエス・キリストが「これを私の記念として行いなさい」と命じられたことを、パウロの時代には実際に行われていたことが記されています。そしてそれは今までずっと行われ続けてきたのです。イエスはたくさんの群衆を前にして子どもが差し出したパンを裂いて配られました。またエマオへの途中弟子二人の前でもパンを裂いて見せました。「自分を裂いて与えるというイエスの行為」は、モーセの時代のマンナの形を超えてより神の心のうちを表しているように思えます。神はご自分を裂いて与えるほどに人間を愛し、大事にされているのです。多くの聖人たちもその姿に倣って人生を裂いて与えたのです。自分を裂くという痛みを伴った自己贈与です。

福音朗読（ヨハネよる福音書　6 章 51-58 節）

「私が与えるパンとは、世を生かすための私の肉のことである」というイエスの言葉にユダヤ人たちは激しく反応します。「人の肉を食べる」ということは絶対に許されたことではなかったからです。「そうしなければ永遠の命はない」という言葉もそれに追い打ちを掛けます。それまでのユダヤ人たちは救われるために神に生贄として羊やその他の動物を焼いて捧げてきました。これに対して「私は生贄の脂の匂いを私が喜ぶと思っているのか」言われます。生贄を捧げられることではなく、生贄となった独り子イエスの体をいただくことこそを神は喜ばれるのです。なぜなら神が用意された最高の食べ物だからです。最高の飲み物だからです。神は私たち一人ひとり、だれ一人取り残さず神の国に迎え入れたいのです。それには私たちの心と体が神に生かされている必要があるのです。

大麦？小麦？　都市農業公園（足立区鹿浜 2023 年 5 月）

カトリック足立教会
主任司祭　野口重光